

化学新館完成によせて —今後化学本館とよばれる建物について—

赤松 秀雄 (名誉教授、化学)

大正12年の関東大震災は本郷キャンパスのイメージを一変したにちがいない。明治大正期を代表した煉瓦造りの建物は崩壊し、そのあとに現在みられるネオ・ゴシック風の建物群が生まれた。そのなかで、化学教室の古風な建物を取り残されたものの如く目をひく。大正5年に建造されたこの建物は、実は煉瓦造りではなくて当時としては最新の鉄筋コンクリート造りで煉瓦色のタイルを貼ったものであり、地震に耐えて残ったのである。ひとり大学構内のみでなく、広く東京をみわたしても、古い建物が震災と戦災によって尽く失われた今日では、これは最も古いコンクリート造りとしても、また大正初期の風格ある面影を完全に保つ建物としても唯一のものであろう。玄関を中心として鳥が翼を張ったような姿は壮麗でさえある。その前の両側には2本のヒマラヤ杉が亭々としてそびえているが、理科大学化学館として竣工した当時の写真では未だ幼い姿である。当時の学生数は1クラス10名にみたない。教授陣は池田菊苗、松原行一、柴田雄次の3先生であった。その頃の雰囲気はしのばれるのである。

筆者が入学した昭和7年当時は、化学科の入学試験には分析化学の実験が課せられた。その試験場が、かつて“新館”、その後“旧新館”とよばれた物理1号館に面した建物である。その二階に分析化学の学生実験室があって、4人分に仕切られた実験台が6台あり、1クラス24名の学生を収容することができた。これが学生定員を規制する基になっていた。当時は別に控え室があるわけではなく、学生にとっては銘々の実験台が大学における居所でもあった。この建物は大正12年に建造されたのであるが、理科大学が理学部に改編され

たのが大正8年であって、その頃から学生の数も次第に増していることから、増築されたものであろう。

それ以来40年に近い歳月が流れていた。その間には戦前、戦中、戦後の激動の時期が含まれている。戦時中は1クラス30名を越す学生を収容せねばならなかった。昭和24年新制度の出発にあたって学生定員を24名に戻したが、他方新制大学院制度の発足により、当時8講座で引き受ける大学院学生の数はにわか急増するようになった。さらに新しい実験機器が次々に出現し、その発達と相まって実験設備を収容する面からも教室の狭隘に対する不満は年毎にましていたのである。それは化学に限ることではなく、広く科学の各分野において研究を進展させるための将来計画がようやく真剣に論議されるようになったのである。一方社会的には、1960年代の経済高度成長の時期を迎えようとしていたから、理工学系の学生の増員が強く要望されるに至った。

たまたま化学教室の発祥が文久元年(1861)幕府の洋書調所に精煉所が設けられたことに起源をもつところから、その百年の記念事業として、時代の発展に即応するよう教室を増築し、合せて学生の増員をはかるべしという案が卒業生の間に起った。その結果百年記念東大理学部化学教室増築期成会(会長柴田雄次名誉教授)が設けられ寄附金を募り、新館を建築して大学に寄贈することとした。この計画は当時の社会的情勢に適合していたので各方面の賛同と支持を得て順調に進行し、昭和36年(1961)10月に地鎮祭を行ない翌年には建物の完成をみたのである。これが運動場に面した、これまで新館とよばれていた建物である。

その結果化学教室では従来の8講座に新たに4講座(天然物有機化学、無機合成化学、化学反応学および物理有機化学)を加え、学部学生定員を45名に増加することができたのである。

増築にあたっては化学教室の将来の発展も考慮したうえで、旧館の左翼をのぼす位置としたのであるが、そこには極めて特殊な建造物があったのである。それは驚くほど強固な建造物でこれを撤去するのに手をやいた。そこには、かつて日本のメートル原器がおかれていたとも言われるが詳かでない。たしかなことは、そこが日本における重力測定の原点であることである。新館の建築にあたっては特に地下2階を設けてその位置を保存している。重力加速度の値、 $g = 9.7978869 \text{ m/S}^2$ というのは、この地下原点室における値である。

ところで、この建物は地下1階地上5階合せて約3830 m^2 であるが増築の趣旨が学生の増加をはかることであったから、その機能を主として学部教育の場に重点をおいて設計した。たとえば、各クラスがそれぞれのフロワーで授業をうけられるように、学生実験室に接して講義室・準備室を配置したほかにクラス毎に専用の学生控室を設けて学生の居所とした。4階の図書室は書庫を含めて430 m^2 である。5階はすべて講堂(250席)にあて、ロビーを広くした。総体にこの建物は大学としては空間的にゆとりのある設計である。このように自由な設計ができたのは寄附によって建てたからで、政府予算では許されないであろう。政府予算では1講座あたり500 m^2 (当時)の割合という規

準があったが、そのことは特に気にかけずに建てたのであった。これは後日理学部教授会で問題になったのである。この建物を含むと化学教室のみでなく理学部全体としてみて規準をオーバーするので、他学科の増築の妨げとなるという見解である。建物自体を寄附したのであるから、そのようなケチなことは言はなくてもよさそうに思えたのであるが、筆者は暗然として貧しさの悲哀をしみじみ感じたものである。それは大学行政に関する貧困の故である。しかしこのような感情は筆者のみでなく、また化学教室に限ったことでもなく、おそらく理学部全体で感じたことであろう。研究環境を改善し時代の進展に即応するため何らかの方針を立てなければならないという共通の意志が理学部全体にもみられた。理学部将来計画のための委員会も生まれた。その背景には1960年代の経済高度成長の波が直接間接に学問の世界をもゆさぶったことは事実である。

それから20年の歳月が流れている。その間理学部の研究環境も建物についてみると大分改善されたようである。この一連の計画に沿って本年は新しい化学新館の完成をみたことを特にうれしく思う者である。これによって、従来の新館は化学本館とよばれることになった。歴史の歯車は1つ進んだのである。また旧館は記念のため保存されるとき。いつの日かこれが重要文化財となる日があることを心中ひそかに思っている。化学新館の完成によせて、昔のことを思い出して綴った次第である。(1983・4・25)

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。